開業助産師が準備している助産事故発生時の初期対応計画

○髙島葉子[1)]　　塚本康子[2)]
1)新潟県立看護大学看護学部　　2)新潟医療福祉大学健康科学部

Ⅰ　緒言

「助産事故を経験した助産契約当事者間の信頼関係形成過程に関する質的研究」(平成 22 年度～24 年度の JSPS 科学研究費基盤研究 C) において，助産事故後の「初期対応」の適否が信頼関係や紛争に至る「分岐」に影響することが示唆された．そこで，本研究では，開業助産師がどのような事故発生時の初期対応計画を準備しているのか明らかにし，助産事故発生時の初期対応モデルを構築するための基礎資料とすることを目的とする．

Ⅱ　方法

研究期間は 2013 年 2 月～10 月である．分娩を扱っている開業助産師 5 名の研究協力者を募り，助産事故の経験の有無にかかわらず，準備している助産事故発生時の初期対応計画について半構造的面接調査を行った.面接は本人に同意を得て IC レコーダーに録音し逐語録を作成し言語化した.データ分析は，開業助産師が準備している助産事故が発生した場合の初期対応計画に着目して質的帰納的分析を行った.

本研究は，新潟医療福祉大学倫理委員会の審査と承認を受け実施した.

Ⅲ　結果

協力者 5 名の年齢は 40 代～60 代，開業歴は 10 年未満 1 名，10 年～15 年 3 名，20 年以上 1 名であった．分娩件数は年間 10 未満～40 例を扱っていた.

得られたデータから 44 のサブカテゴリーと 12 のカテゴリーを抽出した．開業助産師 5 名は，事故を過誤と考え，また助産事故の経験はないと認識していた．したがって助産事故の初期対応について，想像の域を超えない語りとなった．準備している助産事故発生時の初期対応計画として語られたのは【有害事象時の謝罪と誠実な説明・対応】,【ミスを強調しすぎない説明】という 2 つのカテゴリーのみだった．助産事故・紛争予防計画として【自らの限界を知り助産契約を締結できるかの判断】をすることで，リスクを極力背負わないことが肝心であり,【丁寧な妊婦健康診査での不安表出促進や健康状態の見極め】,【緊急時に備えた人・環境・物品・薬剤の準備】をしつつ,【思い込みや情に流されない判断】や【有害・ショックな状況の予測・回避と迅速な対処】,【搬送前後の個別で継続的な関わり】が,【助産師を守る妊産婦･家族との信頼関係】の基盤をつくると考えていた．また,【嘱託医・連携医療機関との関係性】は，開業助産師の正常逸脱の判断や適切な搬送などの対処に多大な影響があることが語られた．そして，開業助産師を支えるものとして【助産診断・ケア技術の研鑽】と【有害事象に対する組織的・制度的な安全担保】の必要性が語られた.

Ⅳ　考察

助産事故の経験はないと認識している開業助産師からは，事故発生時の初期対応計画としては，主として助産事故の予防や正常逸脱時の対応，また，産婦・家族や嘱託医・連携医療機関などとの信頼関係を構築する必要性として語られた．事故を予防するという観点は何より大切である．しかし，医療の特性上，努力を重ねても不可避に医療事故はなくならないという視点を持った備えが必要である．特に助産所は非常に小規模な医療施設であり，従事する職員も少ない．管理者とケア実践者が同じであることから，ひとたび助産事故が発生した場合，対応が後手に回る可能性も否めない.

Ⅴ　結論

準備している助産事故発生時の初期対応計画は 2 つのカテゴリーにとどまった．事故防止に勝るものはないものの，危機管理として事故発生時の具体的な計画を考案し，準備する必要性を啓発していく必要がある.

本研究は JSPS 科学研究費基盤研究（C）25463492 の助成を受けた研究の一部である.